

館報 いしわた

第177号

発行所 石渡公民館
発行人 吉野正年
編集 広報部
印刷所 (株) 双真



秋祭りの主役

「御神楽」



8割方が完成、姿を見せた「御神楽」。区の協会のメンバーが視察（飯山市秋津の「神仏の鷲森」工房、9月29日）

37年ぶり更新
文化祭で披露
子供みこしも

石渡八幡神社の秋祭りで獅子舞や太鼓、笛のお囃子とともに区内を巡り、五穀豊穡や無病息災、区内(家内)安全などを祈願する御神楽、子供みこしがそれぞれ1基ずつ新しく生まれ変わります。総費用のうちの250万円は、宝くじの受託事業収入を財源に(財)自治総合センターが毎年行っている「地域のコミュニティー活動助成」から補助されます。

更新の助成は石渡区が申請団体となり、区、公民館、神楽保存会等から構成された「石渡伝統芸能育成協力会」が窓口と実務を担当。申請をエントリーしてから5年、昨年初めて申請し、2年目の今年正式に認められ御神楽の具体的な製作が始まりました。

今年度初めの5月、仏壇や祭礼用具などの製作、販売をしている飯山市の「神仏の鷲森」に製作を依頼。秋ごろの完成を目指してきましたが、ほぼ8割が完成した9月29日、協会の高山秀則、竹内一郎、広沢幸一さんの御神楽製作委員3名が製作の進み具合を飯山市まで出向き、視察しました。

同市秋津の工房には木の香りを漂わせた白木の御神楽が長持ちとともに姿を現して

(飯山市秋津の「神仏の鷲森工房」9月29日)



いました。長持ちは横60cm、高さ56・5cm、奥行き120cm。その上に同84cm、130cm、73cmと現在のものとはほぼ同じ大きさの御神楽が鎮座。屋根の軒下には龍や獅子の二刀彫の彫刻、左右の側面には雷神、風神も姿を見せていました。

材は耐久性に優れた最高級のケヤキ。製作した木地師の遠藤清さん、村田喜代重さんは、「屋根の湾曲した曲がりが大変で神経を使った」と話していました。協力会の皆さんと、太鼓を置く台や長持ちの棒の位置確認など、最終の打ち合わせを済ませました。

10月には、金具類や屋根の装飾など細部を取り付けて完成。御神楽一式は、子供みこし(既製品)とともに、同月末には石渡区に納められる予定。会では、石渡公民館内に展示、11月7日の区文化祭で区民にお披露目したいとしています。

更新御神楽 ～37年前に桜新町から寄進～

現在、区にある御神楽は2基で、うち1基がこのほど更新されます。その御神楽は37年前に、桜新町から寄進されたものです。

お隣の桜新町に「桜神社」ができた昭和40年代、石渡はじめ近隣地区がそろって神楽を奉納しました。これを契機に、石渡が例年同町のお祭りに獅子舞のお手伝いを続け、そのご縁から同町在住で木工が趣味の竹之内袈裟雄さんが御神楽1基を手作り、寄進してくれました。御神楽の底板に氏名、住所、そして昭和五十九年十月吉日と墨書きしてありました。

それまで区内を巡っていた御神楽は1基のみ。戸数が増え、区内を回り切ると深夜まで及ぶことがあったといいます。2基に増えたことで、区内を東西に分けて回ることができ時間短縮に大いに貢献、今に至っています。

しかし、手作りの御神楽は趣味の範ちゆうを超えた立派なものでしたが、材質などの関係で歳月の経過とともに老朽化。「何十年も先の後世に残る新しい御神楽」の更新が懸案事項となっていました。



秋祭りや笛や太鼓のお囃子とともに区内を練り歩く桜新町から寄進の御神楽(平成30年10月8日)



区内の店舗で御神楽、お囃子とともに獅子舞が奉納(平成28年4月24日、御柱祭)

3年間途絶えたままです。稽古を中止していた期間もあり、技量の維持もひと苦労の状態が続いています。ただ、「来年は御柱祭の年なのでそれに合わせ準備をしてゆく予定。小学生をはじめ大人でもいつでも会員になれるので、一緒にお祭りを盛り上げてもらいたい」と広沢幸一会長は話しています。

石渡に獅子舞神楽が伝わったのは不確定とされていますが、少なくとも今からおおよそ120年以上前、明治末にはすでに伝わっていたとされます。年に1回の秋祭り、7年に二度の御柱祭に登場。獅子とともに、笛や太鼓のお囃子に合わせ御神楽が区内を練り歩き、区民の五穀豊穰、無病息災、区内(家内)安全を祈願します。途中、祝い事(新築、結婚、誕生、喜寿、米寿など)があった個人宅や区内の事業所、店舗(申し込み)では、獅子舞を奉納します。ほか、区内の秋葉様や庚申塔、石渡八幡神社境内の惣魂碑や養蚕の神様、拝殿などでも御神楽、お囃子とともに獅子舞が奉納されます。

獅子舞、笛、太鼓などを継承する「石渡神楽保存会」が結成されたのは戦後。現在会員は大人20人、小中高生が6人。月2回練習を積んでいます。が、昨年の台風19号災害で秋祭りが中止以降、コロナ禍も重なり昨年、今年と神楽の出番は

石渡神楽
「お祭りて区民の
安心、安全祈願」

区民
大運動会
代替え

第2回いしわたウォークラリー ～ 区域拡大 運動不足解消 ～



始まったケヤキの紅葉の中、ゴールを目指す参加者。育成会の皆さんが交通安全を見守った



ゴールかごにカラーボールが入ったらスタンプ



蹴ったサッカーボールがゴール内に入ったらスタンプ



クイズに回答できたらスタンプ



ポイント8カ所を回り、最後は公民館でゴール

家族単位を主に参加者は前回より約1.5倍多い48組、142人。各組ごとに、9時以降に自宅をスタート、コースは思い思いと前回通り。染まり始めた紅葉の中、クイズに答え、ゲームに挑戦、スタンプをもらい、深まってきた秋を満喫しながらウォーキングを楽しんでいました。

未明からの雨が止んだ10月17日、公民館主催の「第2回いしわたウォークラリー」が行われました。新型コロナ禍のため中止となった区民大運動会の代替えイベントで、第5波の感染拡大で当初予定より約一カ月延期しての開催。参加者、主催者全員がマスク着用、3密回避、消毒など予防策を徹底して臨みました。

ウォークの範囲は前回の区内から運動公園一帯まで拡大、チェックポイントも一つ増え8ヶ所に。各ポイントではクイズのほか銅像と同じポーズ、カラーボール入れ、サッカーボールゲームなど新しい試みも登場しました。



円盤投げの銅像と同じポーズが出来たらスタンプ



石渡八幡神社秋祭り ～コロナ収束 御柱祭開催を祈願～



ドングリの実が境内を埋め尽くした石渡八幡神社で10月10日、秋祭りが営まれました。早朝、氏子役員や祭典当番らが拝殿を拭き清め、垂れ幕やのぼり旗などを飾り付けました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大を考慮し、前日の区内を練り歩く神楽や獅子舞、子供みこしなどの宵祭り、本祭りの行列、公民館や育成会が関わる協賛出店など一切が中止となりました。

一昨年の台風災害で急きょ中止となり、神事のみのお祭りが続き3年目。式典は宮司によるお祓い、祝詞の奏上、玉串の奉てんと続き、お神酒で献杯。区長や区役員、氏子、用水組合関係者らが、区の安寧とともに「コロナが落ち着き、来年の御柱祭開催ができるよう…」と祈願して終わりました。



宮司が拝殿内をお祓い



拝殿入り口を国旗などで飾り付け



本殿に向かい区の安寧を祈願する宮司



玉串をささげる高山三良区長



境内の参道にはのぼり旗が掲揚



生花クラブの会員の皆さん
(前列中央が代表の高野みち子さん)

忙しい生活の中、生花で心にゆとりの時間を持ちましょう。入会を勧めている。

「花から元気をもらいます」と会員の小山敏子さん。毎日何かと運ぶ。「生花はさまざまな形に創ることを喜びとする表現ですね。」

クラブ創設は平成14年4月。現在会員は6人で月2回の稽古に励む。「自然が生み出してくれた植物を友として向かい合い、対話する気持ちで生けます」と高野さん。自らも草月流の稽古に月2回足を運ぶ。「生花はさまざまな形に創ることを喜びとする表現ですね。」

花の持つ色や形、高さなどを見極めハサミで切り調整、それぞれがこれまで積み重ねた経験を元にバランスを考えながらまず生ける。傍らでは、会代表で草月流師範の高野みち子さん(89) 9 常会 II がじつと見守る。終わると二人一人の講評が始まった。「豪華ですね」と評価しつつ、「でも、こういう風に」と長い葉の「赤入才」をしながら、うに少し斜めに修正した。ちよつとした向きや高さで見違えるように変化する様子をクラブ員全員がじつと見入る。

クラブ創設は平成14年4月。現在会員は6人で月2回の稽古に励む。「自然が生み出してくれた植物を友として向かい合い、対話する気持ちで生けます」と高野さん。自らも草月流の稽古に月2回足を運ぶ。「生花はさまざまな形に創ることを喜びとする表現ですね。」

9月初旬の残暑厳しい公民館和室。エアコンを効かしながらも新型コロナウイルス感染対策で窓は換気のため全開、マスクを着用し、「生花クラブ」の教室が始まった。

クラブ紹介「生花クラブ」
さまざまな形に創る喜び

花屋さんから取り寄せた花は5種。長い幅広の葉「赤入才」、ピンク色の「トルコギキョウ」、ラン科の真っ赤な花「モカラ」、葉脈がきれいな短めの葉「カラテア」、そしてドライフラワーの薄い黄花の「スターチス」。花の名前をメモしお稽古はスタートした。

花器は、それぞれが毎回違ったものを持ち寄り、この日は、花瓶のように縦長、広く平らなお盆状、四角い横長など。それぞれの花器に合うように生けることが勉強の一つという。